

武庫川にみられる曖昧性

～川遊びにみる人と自然の共生～

嶽 山 洋 志

はじめに

ちょうど2年前くらいになるだろうか、六本木ヒルズの記念展「世界都市」展で野田氏監督による『東京静脈』という映像に出会った。「普段みることのない角度からの都市・東京」というコンセプトで、神田川を上流から下っていく遊覧映像であり、大量の物資が活発に運搬される「動脈としての高速道路」とのコントラストが面白く、かつ不気味であった。表と裏という捉え方は間違っているかもしれないが、確実に神田川は東京というものの裏の表情を映し出していた。いつから川は裏として扱われるようになったのか。映像と音楽による印象が強かったこともあって、その後、色んな地域へ出かけるたびに遊覧船があると無性に乗りたくなる感情にかられる。フランスでは、セヌ川の流れにのりパリの名所をたどる。シテ島にはじまり、マリー・アントワネットの最期の住まいであるコンシエルジュリー、処刑場があったコンコルド広場、1日ではなかなか見尽くすことができないルーヴル美術館やオルセー美術館など貴重な建築物がたくさん集まっている景観を楽しむことができる。パリへ行くのは冬がオススメだ。水上からの景観は、都合よくマロニエの葉が落ち、建築景観を楽しむには最適な状況となる。中国は夜がいい。同じく黄浦江の流れにのり、ライトアップされた植民地時代の古い建物が立ち並ぶバンド地区を眺めながら、ナイトクルーズを楽しむ。鮮やかにデコレーションされた遊覧船の数々にも驚くだろう。こういった河川は観光河川として、名所を活かす、あるいは創ることに成功している。が、どちらかというとはり静脈としての匂いを漂わせ、神田川の映像とかぶるところが多かった。そして2006年、マレーシアでショッキングな風景に出くわす。タクシーでサバ大学へ向かう途中、川ではないがコタキナバルの海岸線にたたずむ高床式の住居群と干潮時にそこで何か食料を捕獲している生活者をみた。なんとなく危険な香りが漂う。動脈としての水辺がそこにあった。例えるならば、公道を歩いているうちにいつの間にか他人の家に入り込んでいくような感覚といったらいだろうか。公と私の境界が曖昧である環境、川を生活の場として使い込んでいる人々、そういった場所やアクティビティがなされている風景全体に人と自然の一つの共生型を見た。そして同時に、川は必要であると強く感じた。ここではそういった観点から武庫川の過去・現在・未来をみていきたい。

2. 江戸時代の川

公と私が曖昧な空間利用およびデザインが、日本の河川でも江戸時代には見られた。大学時代の学友である小田氏の論文「『水の都』近世大坂における管理や利用面から捉えた水辺のデザインに関する研究」で彼は、河川環境の利用特性として「客用船着場」「市場」「荷揚げ場」「遊行地」という4つの分類とともに、そこで展開される様々な人間活動も詳細に抽出している。例えば「天満青物市場」という絵図に描かれる人間の行動としては「換金」「飲食・休憩」「競り」「荷置き」「運搬」「焚き火」「荷揚げ」「荷物輸送」といった8種があるという。飲食は建物の中で行われているが、競りは屋内ではなく屋外で行われており、荷物や旅客の出入りがある川・川岸から後背地の建物までが一つの生活景として描かれている。どこからどこまでが公の空間で、どこまでが私の空間なのかわからないところが非常に面白い。

では武庫川はどうか。同様に絵図における空間利用の抽出を行おうと、博物館の収蔵庫へ向かい摂津名所図会と西国名所図会を広げた。が、それらしい人の活動は描かれておらず、むしろ自然のありようがそのまま描かれているようで、明らかに大坂の水辺風景とは異なっていた。理由は尼崎や西宮から名塩や宝塚あたりまでの物資の運搬は、水運よりも陸運の方が発達しており、水運は水利関係でなかなか許可が出なかったので発達しなかったことによる。武庫川は水運活動の場としての川ではなく、自然の川、あるいは農業用水のための川であったと言っていいだろう。

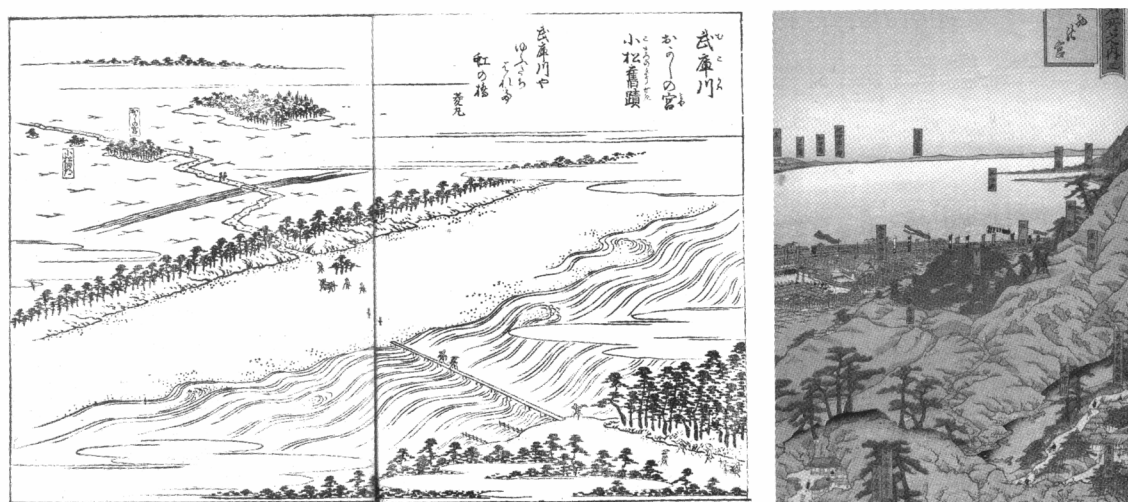


図1 摂津名所図会（左）と西国名所図会（右）に描かれた武庫川

3. 武庫川での川遊び

江戸時代の武庫川には空間の公と私の曖昧性を見出すことが難しかった。そもそも人間活動が活発でなかった川であるのだから、現代でも武庫川に人が関わっていく動機付けなど必要ない、人と自然

の共生型を追求していくことよりも、純粹に自然の河川として再生していくことが求められるのではないかと考えていた。そんな折、三田市の「曲がり」地区で2名の50代男性に武庫川での遊びについてお話を聞く機会があり、そこで面白いことに気付く。

まず話は、曲がり地区で実施していた代表的な川遊びから始まった。しばらく、水泳と魚釣りの話になり、それぞれについての細かい話に展開していった。水泳については「もともと学校にプールがなかったので、泳ぎは川で学んだ。しかもそれは学校の先生ではなく、上の学年の人から学んだ。それだからかこ悪い泳ぎ方だけど、深く潜れたりする力は結構ついたように思う。」武庫川は泳ぎを学ぶ場であり、また、学校の先生ではなく学校の先輩が指導者となって遊びが継承されていたことが聞き取れた。そういえば、最近とくにこんな看板を目にする。「危険！遊泳禁止！」事故でも起こるものなら責任は行政にくる。看板設置は止むを得ないことだろうが、それに加えて学校や家庭からも「近づかないように」という指導がくれば、子ども達はますます武庫川から遠ざかっていくだろう。かといって、すぐに看板を取り外すことができる時代でもない。武庫川を良く知っている人達が中心となって、子ども達が武庫川へ近づきやすいきっかけを創っていくことが求められるだろう。

少し話がずれた。論点の中心は魚釣りである。「つけ餌にキャベツに付く青虫を使ったり、ミミズやマツムシ、イナゴやバッタなどを糞でとって使ったりしていた」との語りからもわかるように、周辺で採集した昆虫を釣りのえさにしていることがわかる。この語りこそ、川遊びが持つ空間の重層の利用を表しているといっていいたいだろう。単に川遊びは河川空間のみで完結するものではなく、周辺環境と連動して起こるものである。こういった周辺環境との関連の中で起こる遊びとしては他に「森でササをとりそれを武庫川に浮かべて遊んだ」「武庫川にいるホタルを周辺の菜の花畑から菜種をとってきて、それをさおにつけて振り回してホタルをとった。周辺にホタルはいくらでもいるので、僕達は採ることに楽しみを感じていた」「川底にある泥を使ってそれをつかって焼き物を作った経験がある」「ここらへんには使わなくなった電柱を使って4本の流れ橋を設置していた。当時の電柱は本造で自然にやさしかった」などが語られた。さらに「“かわがり”や“みちづくり”という川の掃除などが行われていた。これらは大人がやっていたけど子供にとってみるとそれも楽しかった」とあるように、大人の河川管理行為が子供達にとっては遊びとして受け止められていることも特徴として挙げられる。さらに、植物や昆虫も多様で、「サクラタナゴ、ハヤ、ウナギ、ヨツメ、スナグイ、ヨシノボリ、サンショウウオ、タガメ、ゲンゴロウ、カワセミ、ヤマセミ、イタドリ、カエルツリ」などが語りの中で確認された。その中でも「松の実をガムがわりにして食べたり、たんぼの畔にあるグミや野イチゴを食べたりして育った」との語りからもわかるように、周辺地域にある自然の恵みをその場で食べながら遊んでいたことも分かった。

そういえば、西国名所図会に武庫川で釣りをする人物が描かれていたが、おそらく彼も周辺の草むらから虫をとってきて、餌として活用していたのではないかと、などという妄想が働いてしまう。江戸時代に水運が発達しなかった武庫川は、堂島川などのように水運では活気づいていなかったが、川遊びという観点からはもしかすると自然が多く残っていた分、子ども達が活発に使いこんでいたのかも

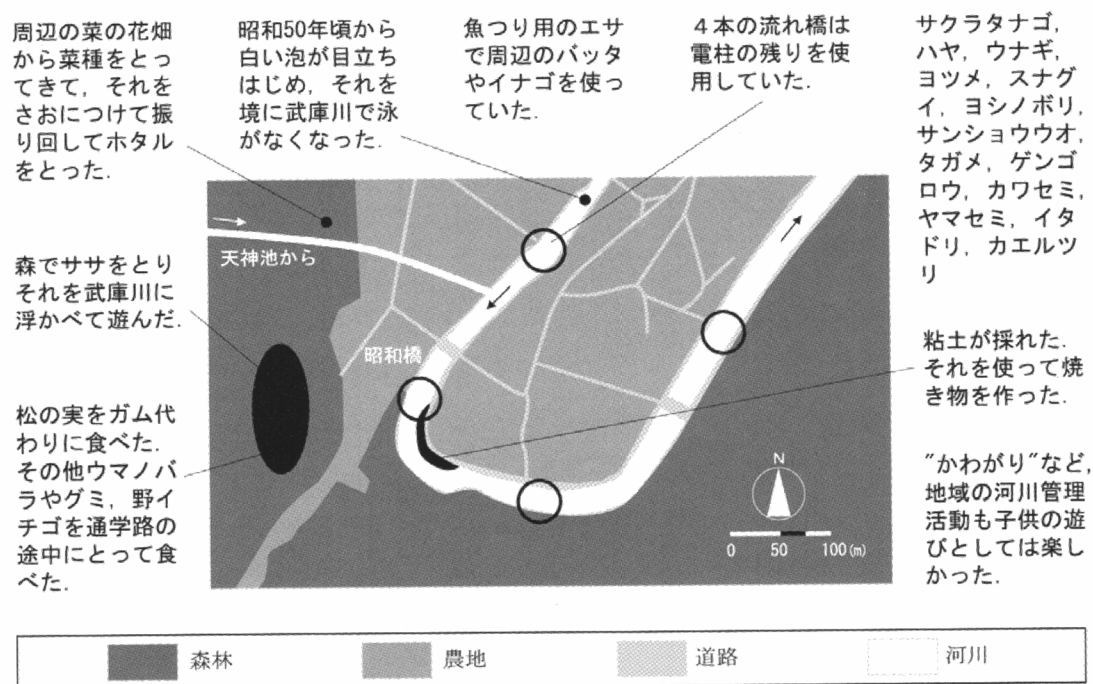


図2 親世代の武庫川（「曲がり」地区）周辺の環境とそこにおける遊びとの関係

しれない。

4. 衰退化していく川遊び

以上のように昔の武庫川における川遊びの特性としては、河川単独ではなく、たんぼや森といった周辺環境を一体的に使った遊びが中心であったことを挙げることができる。また、食べられる木や草花の存在、日常的な河川管理作業も遊びに繋がっていることが伺え、土地の公私に関係なく、一体的に遊び空間として活用していることがわかった。しかし、現代の河川はどうだろうか。機能を優先させる現代社会では、河川空間はないがしろにされ、管理の難しさも手伝い十分に満足できる空間として利活用されていないのが実態であろう。

図3を見てほしい。これは三田市の武庫川流域における土地利用の変化を示している。これを見る限りでは、河川の付け替え工事といった大きな改修は少ないと判断できるが、三田大橋上流の川除地区などでは（兵庫県，2000），拡幅工事や護岸整備が周辺住民の生活の安全性確保という観点から行われてきた。地元の人も「雨の多い時は洪水が起こり危険」「河川の幅が広がったことや水深に変化が無くなった」「昭和50年代頃に上流部から白い泡のようなものが流れてくるようになり、汚いで川へ遊びに行くのをやめた」と回答しており、空間の変化や水質の悪化が読み取れた。しかし、一方で「学校やPTAで川遊びを禁止している」など、空間的な変化だけでなく、子どもの安全に関する指導といった観点も子どもの川への関わりを遠ざけていることもわかった。

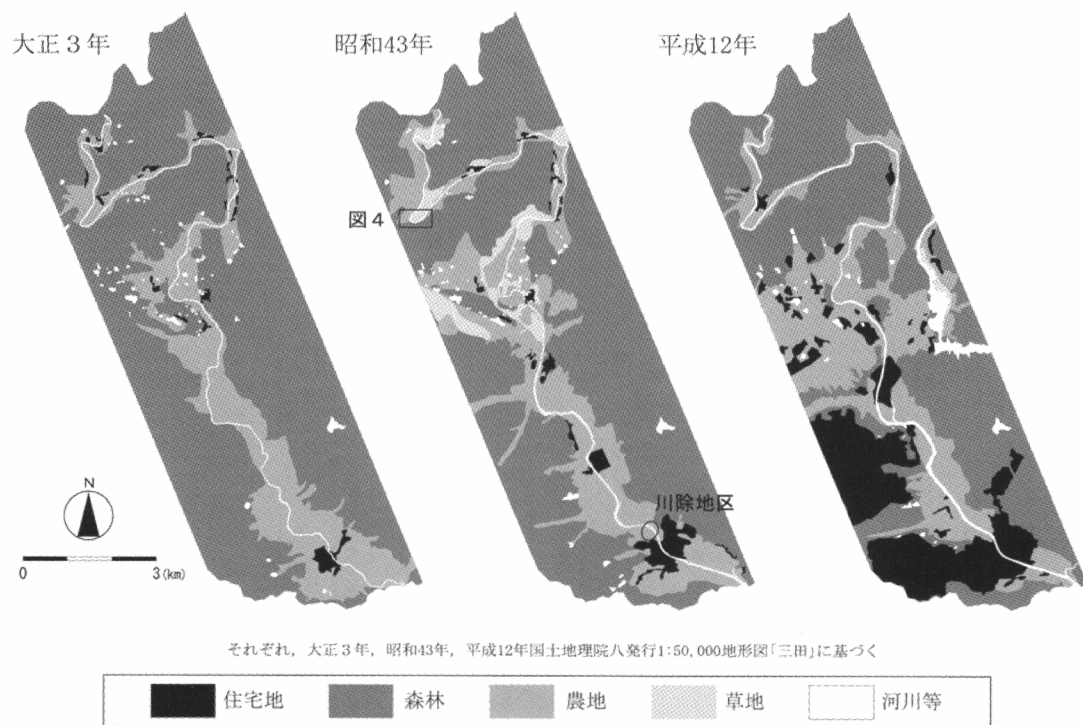


図3 三田市の武庫川流域における土地利用の変化

もう一つのデータをみてみよう。表1と図4は、兵庫県の市町の行政関連機関でまちづくりに関わっている企画関連の部局を対象に行った、「親世代」が子どもの頃の遊びと、現在の「子ども世代」の遊びの比較に関するアンケート調査の結果である。これらのデータより、現在見られなくなったと感じている遊びのなかで、とくに川遊び（親世代：11地区，子ども世代：4地区，以下同じ）が減少してきていることが浮かび上がってきた。水遊びでは海水浴（4地区，3地区）が今でも行われているが、川遊びおよびため池遊び（3地区，1地区）に着目すると、これらの場所は遊び場として使われなくなってきていることが伺える。また、川遊びのなかでも「魚採り・魚釣り（13地区，2地区）」、「虫取り（15地区，3地区）」など、生き物とりの遊びがとくに減少していることがわかった。ちなみに、減少が顕著な遊びがもう一つあって、それは「雪遊び」であった。積雪量の多い兵庫県の中山間地域では、「雪合戦（親世代：5地区，子ども世代：1地区）」や「竹スキー（親世代：4地区，子ども世代：1地区）」が行われていた。しかし、現在では集団での遊びが行われにくくなっていることや、遊びに使われる素材が自然物から人工物に変化したため、これらの遊びが減少してきたものと思われる。こういった絶滅の危機に瀕している遊びを保存し未来に継承すべく、レッド遊びリストなるものを作成してはどうか、という提案を客野研究員から受け、同氏とともに博物館の企画展に出展したことがあるが、これからもより詳細な遊びについて資料を集め、地域づくりに活かして生きたい。

表1 兵庫県の各市町における遊びの内容

市町名	遊び
竹野町	竹スキー キンカン（雪合戦） 川遊び（竹野川） 牛飼い 木の实拾い 魚捕り 山菜採り うさぎ捕り 遊戯と泥棒 クギ立て 缶けり 缶下駄 陣取り くず鉄拾い 鬼ごっこ メンコ けんぱあ なわとび はないちもんめ 走り 野球 まりつき
但東町	川遊び 竹スキー 山遊び 山や川を利用した遊び（川飛びこみ、かくれんぼ） 釘さし 風上げ コマ廻し
養父町	川遊び 川原遊び
野原	野原
浜坂町	いなご・バツタ捕り 川遊び セミ捕り かくれんぼ 缶けり 陣取り ベクタン（メンコ）
温泉町	むくろじ遊び（羽子板） 川下し（魚捕り） 流し針（魚つり） ぶちゴマ 杉鉄砲 ベクタン ゴム銃 紙鉄砲
関宮町	基地作り セミなどの虫取り 川魚 つり イナゴ捕り ソリ 水泳（八木川） スキー（八木高原、葛畑） かまくら（裏山） 雪合戦（小学校） 竹とんぼ
大屋町	キンカン 洞窟探検 缶けり 釘とり チャンバラ 陣取り メンコ
篠山市	川遊び イナゴ捕り 石けり ホロ玉鉄砲 コマ廻し メンコ かくれんぼ 野球 縄跳び ドッチボール 釘さし
山南町	石もて 木馬すべり 杉鉄砲 手まり うまとび まりとり ゴムとび メンコ
猪苗代町	川遊び 石けり メンコ ベーゴマ 缶けり ゴム飛び 釘さし
宝塚市	遊泳 魚捕り 魚つり（荒神川、武庫川）
伊丹市	木登り 石けり 泥だんご作り イナゴ捕り バイ（ベーゴマ） ゴム飛び 陣取り 蛇子とり 羽つき コマ廻し 缶けり ローセキ ごっこ遊び イナゴ捕り おじゃみ バイ 釘さし 杉鉄砲 ベクタン 輪廻し カンカン 野球 ドッチボール
西宮市	キリギリス捕り 近所の探検 セミ捕り 海水泳（香櫛園浜） 山登り（甲山、北山） 缶けり 陣取り ちゃんばら 相撲 空気銃
神戸市	石けり 山菜採り 蓮華の花輪づくり ササ舟 セミ捕り 木登り 竹馬 リム廻し 石蹴り 缶けり かくれんぼ メンコ 縄跳び ケンパ 風上げ 羽根つき 草相撲 竹とんぼ 竹鉄砲
洲本市	スケート 川泳ぎ 海泳ぎ かぶと虫・クワガタなどの虫取り リム廻し 鬼ごっこ 陣取り
緑町	小魚捕り 遊泳（為池、川） 山桃・アケビなどの採集
三原町	小川での魚捕り（浜辺の小川） メンコ
五色町	蛸釣り 山桃・マツタケ採集 石投げ 川飛びこみ 木の实採り れんげ摘み シジミ捕り どじょう捕り 城作り 海水浴 魚つり 鬼気芝居 レスリング かくれんぼ 相撲コマ廻し ベクタン ケンパ 風上げ 水鉄砲 竹鉄砲 竹馬 ちゃんばら ターザンごっこ 敷き犬駒ごっこ 竹馬 竹とんぼ じゃんけん遊び 缶けり 縄跳び 陣取り
千種町	川魚とり きんま（ノリすべり） メンコ
佐用町	山小屋作り 雑魚とり 竹スキー ソリ 雪合戦 山歩き 探偵ごっこ そり廻し メンコ 野球 かくれんぼ ちゃんばら 死刑 ひも相撲 肝だめし 釘立て 戦争ごっこ おしくらまんじゅう 缶けり ゴム飛び
新宮町	魚捕り せみ（幼虫）とり 山すべり ササ舟流し 鬼ごっこ リム廻し メンコ けんぱあ 杉鉄砲 紙鉄砲 兵隊ごっこ チャンバラ 羽根つき 竹馬 かくれんぼ 野球 ドッチボール 風上げ
上郡町	魚捕り 雪合戦 水泳 かくれんぼ 缶けり ターザンごっこ 野球
相生市	家作り 魚つり 落下傘拾い（ベーロン祭り） めんこ 釘立て コマ廻し 缶けり 騎馬 相撲 野球 風上げ 缶けり
姫路市	木の实拾い うなぎ捕り 木馬 川飛びこみ 山いちご採り 鬼ごっこ かくれんぼ
香寺町	クワガタ・カブト虫捕り 水泳 騎馬 ターザンごっこ メンコ 水鉄砲 竹馬 コマ廻し 野球
福崎町	馬乗り つり 川泳ぎ セミ捕り 木登り 石彫り とりもち捕り（竹にとりもちをつけて昆虫を捕まえる） リム廻し パッチン 風上げ コマ廻し 竹馬 おしくらまんじゅう メンコ 鬼ごっこ 竹とんぼ 缶けり 釘さし 地面とり ドッチボール アンタガタドコサ 羽根つき 縄跳び
加西市	雑魚捕り 雪合戦 コッチン パッチン コマ廻し 縄跳び 風上げ
加古川市	水泳 魚捕り 虫取り かくれんぼ パッチン（メンコ） 三角野球 竹馬 陣取り コマ 風上げ 騎馬 縄跳び
小野市	魚つり 魚つき セミ・トンボ捕り メンコ 缶けり コマ廻し 風上げ 竹馬 鬼ごっこ かくれんぼ 野球 戦争ごっこ おしくらまんじゅう 相撲
稲見町	たにし捕り 鬼ごっこ かくれんぼ メンコ
明石市	タニシ捕り バイ 海水浴 魚捕り 蛇子とり じゃんけん ベクタン バイ 騎馬 缶けり 野球 コマ廻し 竹馬競争

(下線は親世代にのみみられた遊び)

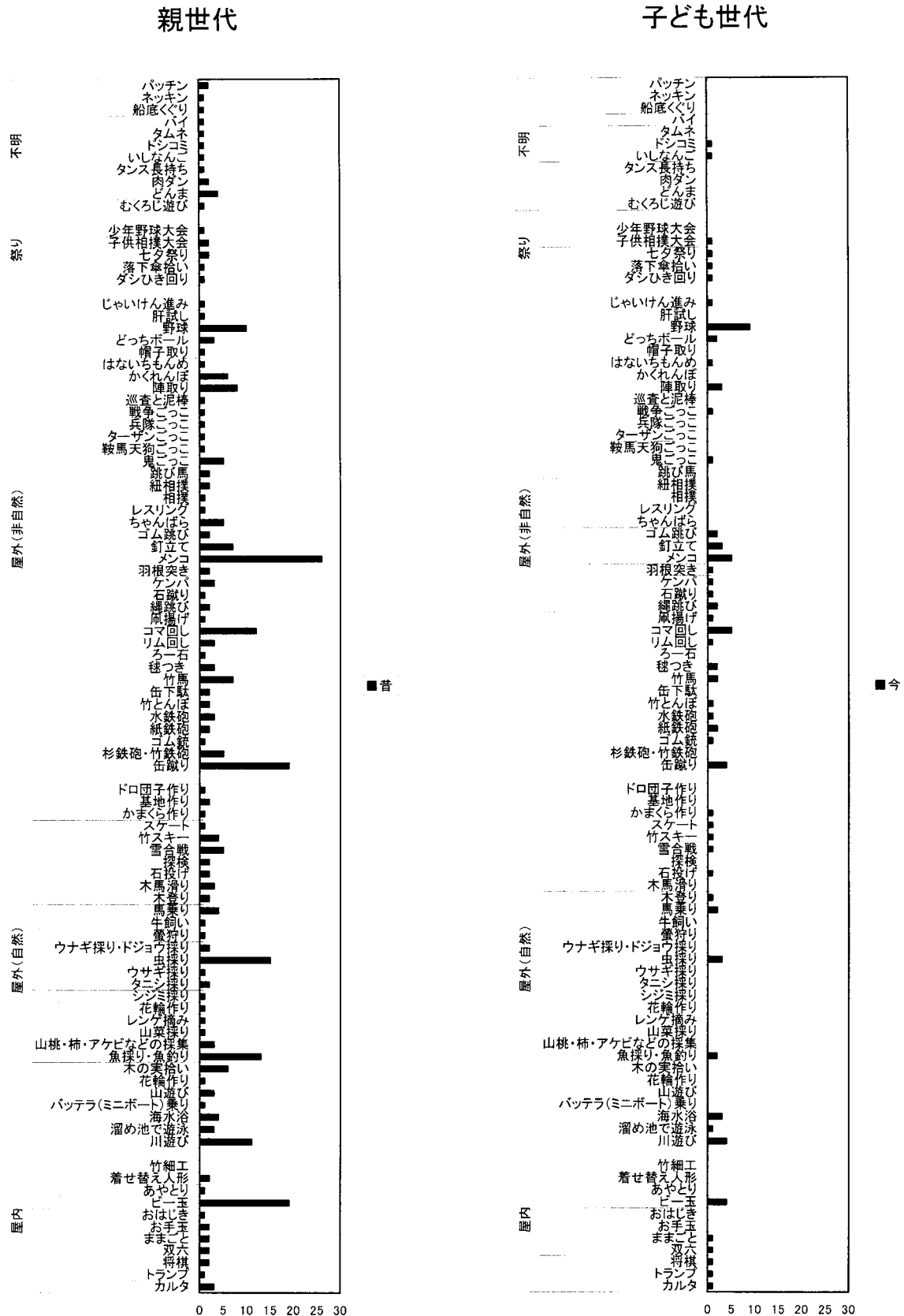


図4 「親世代」が子どもの頃の遊びと現在の「子ども世代」の遊びの比較

5. 武庫川がより市民に利用されるために

武庫川での川遊びに見られた公私が曖昧な河川および周辺空間の利用は、武庫川の魅力を高める上で重要なテーマになっていくだろう。河川改修にともない、川と周辺空間との間に生じた境界を取り除き、一体的な遊びによる生活景をどうすれば形成できるのか、あるいはそういう場所が武庫川にあるのか、そんなことが次に気になってきた。まだ不完全ではあるが、現在、河川の遊び場としての評価シートの作成を検討しているところである。僕自身、もともと公園の設計を勉強していたこともあって、遊び場のデザインや遊びプログラムを考えるのがどうも好きらしく、武庫川のどの地点であれば最も多様な遊びが生まれるか、ということについて考えたりする。多様な遊びが生まれるための条件として、第一に、これまでの論点である周辺土地利用の多様性が挙げられる。それが多様であればあるほど周辺環境と一体的な遊びが展開される可能性を秘めているといえる。極めて単純な理屈である。第二の視点としては、護岸の形状が挙げられる。護岸はコンクリートよりも自然護岸が嬉しい。それと関連して河川に隣接する道路幅も影響してくる。幹線道路に沿って河川が流れているところでは、アプローチが難しい。それから飛び込みや景観としての魅力の向上に貢献する橋の有無について、形状も含めて検討することも必要だろう。石遊びであれば石の大きさやカタチの多様性が、寄り道をしている時の遊びであれば食べられる草花や樹木がどれくらいあるか、そんなことも気になってくる。あるいは河川を管理している主体がどの程度子どもの遊びを意識しているのか、ということも重要だろう。例えば護岸の草刈など、河川を管理する組織がしっかり備わっているだけではダメで、根こそ



写真 三田PPPによる田んぼでの火を使った遊び。消火用に武庫川の水を使用。

ぎ草刈をされてしまうと逆に楽しみが減ってしまう。周辺住民の意識も把握する必要があるだろう。そんなくだらないことを考えるのが大好きだ。地図や写真を見ながら武庫川での遊びが最も多様になると考えられる場所を絞っていく。そして、そこで重点的にアクティビティを実施していくことが、武庫川と人々との関わりを深めていくことに有効ではないかと考えている。

こういった河川の魅力を最大限に活かすべく、面白い団体が三田で活動を始めている。三田PPPという団体だ。彼らは子どもの自由な遊びを助けるべく、公園を中心に活動を展開している。しかし、公園ではなかなか火が使えないので、彼らは冬場の刈りとりがすんだ田んぼで火を使った遊びを実施する。子ども達は火をつけたり消したりといったアクティビティを楽しむが、消すための水は武庫川からバケツで汲んでくる。周辺の菜の花畑から菜種をとってきて、それをさおにつけて振り回してホタルをとる、というお父さん世代の方々が、子どもの時に興じていたホタルがり。遊び方は異なるが、武庫川と周辺環境とを一体的に使う遊び、という観点から見ると同じである。こういう小さな繋がりをたくさん創っていくことが武庫川との関わりを深めていくもっとも有効な手立てだと思う。

人間にとって水辺は他の場所と違った異空間として認知され、非日常であり、時として新たな挑戦の場である。それだけに子どもにとっては新しい発見や危険すら伴う場合もあり、創造力を高めてくれる場所にもなる。そういった河川の魅力を高め、武庫川に対する人の関わりを深めていくためにも、周辺環境の公私に関係なく一体的な環境およびアクティビティをこれからも提案していきたい。